

初年次教育におけるキャリア教育に対する KJ 法を用いた参加型授業の試み

キーワード：初年次教育、キャリア教育、リーダー力育成、KJ 法、参加型授業

○齋藤 智、鈴木 宏
新潟青陵大学

I 目的

初年次教育は重要視され、キャリア教育は重要であるが、有効な方法を探しあぐねている。一方、KJ 法は変法も多く、その有効性は一定でない。

今回、初年次教育・キャリア教育の一環として、社会人講師の講義と、KJ 法を用いた参加型授業による講義内容のキーワードへの認識の強化を目指す授業形態を導入し、その教育効果について検証を加えた。

II 方法

対象とする学生は、本学看護学科と福祉心理学科 1 年生を対象とする「人の暮らしを見る I」受講者、看護学科=82 名、福祉心理学科=121 名の総勢=203 名である。学際的取組として、学科混在の 15 グループ (G) (14 人=8G、13 人=7G) とした。

社会人講師 (病院・社会福祉施設や企業に勤務) による自身の経験を披露する講義と、KJ 法を用いた参加型授業によるテーマへの学生の考えのまとめを、隔週で 4 回実施。講義内容により 4 つの異なるテーマを設定し、今回の最終課題を「リーダー力育成」とした。毎回グループリーダー 3 名を学生が選び、グループワークを進行。各グループに模造紙とポストイットを配布し、学生はテーマに対する 3 つの考えをポストイットに記載することからスタート。得られた内容により、ポストイットを最大 3 つでまとめて表題をつけ、それらの内容によって集合化し、最後に関連付けをして全体の物語化を図った。

KJ 法を利用して学生が取り組む様子と模造紙へのまとめ方、個人レポートにより検証作業を進めた。

尚、倫理的配慮として、KJ 法実施前に、学会発表を説明し、個人としての評価ではなく、グループとして成果を評価・検証することで了解を得ている。

III 結果・考察

最初は KJ 法の特徴であるポストイットを最大 3 つでまとめる手法に戸惑いを見せたが、最後には個人意見を安易に集約することなく、一つ一つの意見をしっかり把握し、問題点を多極的に見極める重要性を理解した。次にグループ化後に、それぞれの関連性を見極めてまとめる工夫が見られる程になった。最後に関連性からグループの物語を作成する作業を行い、問題点の軸を独自に設定することに進行し、グループとして課題に対し満足できる回答を得た。

作成過程で少数派意見に対して聴くという姿勢 (傾聴力) を持ち、グループ内で持つものが意見を交わす

中で、自身の考えを分かりやすく伝えること (論理力・表現力) を実践していた。同一メンバーで役割を変えながらグループ活動を繰り返し、他者の意見を本質から見極める重要性の理解、問題点の確認、共有する必要性をメンバーが意識していた。

最終日のアンケート調査で、参加者 203 名中 3 名が本手法の有効性について否定的であった。KJ 法は、鈴木が医学部の授業に長年用いてきたが、学生から使用法の困難さを指摘されてきた。今回、参加学生の大部分が興味を持ち、有効性に賛意を示した背景を考察すると、自分の意見・経験に加えて講演からの広い視野からの情報と、KJ 法を複数回経験したことの相互作用が関連したと思われる。

今回の期待を大きく上回る成果として、参加型授業を介してリーダーとは何かを学生が自然に自覚したことである。これらを可能にしたのが、KJ 法の活用フローである。テーマの意見集約の進行過程において、キャリア教育の基礎力養成を可能とした。具体的に例を挙げれば、最終的にグループ全体の共通認識の総合軸設定へのリーダーの役割を担う学生の存在が、成果を左右したことと関係する。グループ活動の回数を重ね、多数がリーダーを経験し、参加者の立場と併せ役割を理解し、リーダーの必要条件を自覚したことである。また、同時にリーダーを補佐する学生が自然発生的に表れ、その重要な役割も併せて自覚した。

KJ 法で重視されるポストイットへの意見記述についても、自発的に意見を十分にお互いが認識できるよう工夫するなどの重要な発展が見られた。

職場の採用選考において、学生の考えや行動パターン等を見るグループディスカッション等が実施され、立候補したリーダーではなく、活動の中で自然にリーダーとして取り組める人材が高評価となる。その場しのぎの就職テクニックでは対応できない分野における初年次教育の一環として、KJ 法による参加型授業導入が有効である可能性を示唆したと思われる。

IV 結論

初年次教育としてキャリア教育を開始する学生に対する KJ 法による参加型のグループ活動は、コミュニケーション力、リーダー力などの気付きを与え、その後の学生生活での課題の明確化が可能となり、有効な手法と思われた。今後も多年度の継続した検証を進め、量的な指標も加えながらその理論の体系化を図るつもりである。